

スキーによるアプローチの考察

——ニベツ山合宿を終えての剣岳チンネ——

木 曾 雅 文

まず 今合宿にスキーを使用しようと思ったのは、芳野満彦氏による“積雪期チンネ初登攀”を知ったからである。東大雪山系のニベツ山は、このようなスキーによる登山に最も適した山域であり、また、我々の手懸けていなかった日本百名山の一つであった。しかし、我々の求めたものは、山そのものではなく、山スキーであった。

3月14日 10:10 我々3名は大阪駅を出発し、翌日の18:00に十勝三股に到着した。天候はくもり。積雪量40cm思っていたより雪が少ない。しかし、気温はかなり低いようで、ガラス窓に外からビニールを貼り、雪に備えている。我々の一夜の宿となった、この小さな三股の駅の待合室には、ものすごい石油ストーブが置かれていた。なにしろ、ストーブの傍にあったアイスボックスが溶けてしまうほどのだ。

3月15日 8:00 スキーをつけ、三股の駅を出発。道路は除雪されていて、路面はアイスバーンになっている。大きな荷物を担いで、除雪された道をスキーで進むのがこれほど難しいとは思いつかなかった。約一時間進んでも、まだ三股の駅が見えるのだ。そこで、仕方なくスキーを担いで歩くことにする。スキーを担ぐと、肩に「ズシン」とこえる。習慣とは恐ろしいもので、我々にとっては、このアイスバーンの道路よりも、除雪されていない林道約2.4kmの方が楽に進め、8:30 にベースハウス(B.H.)の岩間温泉にたどり着くことができた。岩間温泉といっても、営林所

の小屋が一軒あるだけである。B.H. は雪に埋り、入口だけが現われている小さな小屋であるが、中はきれいになっている。明日に備えてスキーの手入れと、荷物の整理などをし、早めにシャワーにもぐりこむ。

3月16日 あいにく小雪が舞う空模様である。まずスキーに慣れることと、ニベツ山のアプローチの偵察のため、石狩岳に向けて出発。

音更川に沿って進むが、スキーの調子が悪いので時間がかかる。その上、小さな沢の流れを渡る時に濡らしたシールが張りつき、ナイフで削り落としながら進むといった、まったく情けない出だしとなった。さすがに、三時間もこの様なことが続くと、スキーにも慣れる。B.H. より第二の沢が入るところから尾根に取り付き、岩が現われる、1400mの地点まで進み、テントを設営し、上部の偵察を行なう。

3月18日 テント場より100 mほど岩とブッシュの複層林が続き、1700m 附近の森林帯をぬけると、岩がところどころに現われる雪稜が続く。しかし、別に問題もなく通過。

石狩岳9:25 ニベツ岳が、遠くにその特長ある姿を現わしている。それは、「山の東側半分を大きなシャベルで削り取ったような山だ。」と言ったらよくわかってもらえるだろう。テント場に着いたのは11:00。昼すぎになると、また雪がちらついてきた。ここ特有の天候らしい。

3月19日 7:40 出発。登りにあれほど苦しん

た尾根も、下りは、ころびながらでもあっけなく
くだれ、B.H.に、10:30に着くことができた。

3月20日 いよいよニベソツ岳に向けて出発ノ
という時に、スキーの金具が折れて、出発がかなり
遅れる。7:40にようやく出発。石狩岳ア
タックの経験により音更川右岸を進むことにする。
硫黄の臭いが強い、白雪の中に黄褐色の岩を露出
させた、白煙をあげる地点をすぎると、下部二又
はすぐそこである。ここより沢と分かれ、小天狗
岳より下る尾根に取り付く。

この尾根は広くて、スキーで進むには快適であ
る。ようやくスキーにも慣れ、スムーズにすべれ
る様になる。スキーによるラッセルは、ワカンの
時に比べかなり早いと思われる。しかし、その分
非常に疲れる。セカンド以下に比べ、トップは比
較にならないほど疲れる。この様な具合で、15:
30に天狗のコルにたどりつき、雪洞を掘って、
一夜の宿とする。

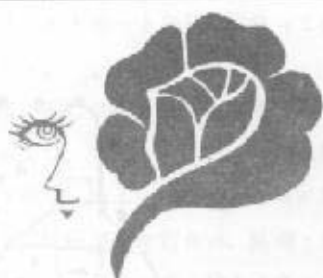
3月21日 森林限界である天狗のコルをめけ
ると、まるでスキー場のような前天狗への雪面が
続いている。この斜面を登りきると、いままでと
打って変わって、アルプス的な山容になり、スキー
で進むのが難しくなる。その上、このころより
ガスがかかり、視界が悪くなり始めたため、天狗

岳にてテント設営をし、翌日、ここからニベソツ
にアタックをすることにする。

3月22日 朝目覚めると、紺碧の空に、ニベ
ソツが純白の頂をそびえさせている。今日も午後
からは好天が望めないと思われるので、行動を急
ぐ。スキーをアイゼンに履き変えて、アタックに
出発する。5:15。ニベソツに続く稜線は、以
前に述べたような地形なので、スプリントラッセル
より登ることにする。

北西側の側稜と交わる地点は、まるで、その側
稜の側面を乗り越えて行くという感じである。ピー
クに近づくにつれて、傾度は増し、ピークの手
前の側稜は、雪壁となり、我々の行く手を阻む。
その上、天候は思っていたとおり悪くなり始め、
青空はもはや見えなくなっていた。

我々はザイルを一本しか持っていなかったのも、
しかたなく、Fにこの雪壁の下にて待ってもら
うことにし、私とHでピークのアタックに向かう。
雪壁の下部は良く雪がしまっているが、上部はビ
ャゲルで雪を落としながら登ると、その上の雪が
頭の上に覆いかぶさってくる、という状態である。
雪が軽いせいも、あまり抵抗がなく、まるで雲の
中にいるような感じである。40mいっばいザイ
ルをのびしたところで斜面は落ち込み、雪壁は終



ボニータス

BONITAS

吹田市千里山東・関大正門前 TEL 06(387)1086

わりとなる。ここから、右(西)に傾斜した雪面を10分ほど登ったところがピークであった。東側が完全に切れ落ち、しかも、西側に傾斜したピークであるため、足を真直ぐに置くことすらできないほどである。8:45。

我々が登頂した時には、もはやガスがかかり始めていたので、山頂には一分ほどいだけで、すぐに下山にかかる。さきほどの雪壁を下るのは困難と思われたので、前後沿いに、雪壁を大きくトラバースするようになっていることにする。Fと合流後、天候がくずれてしまわないうちに、A.C.に降りつけるようにと祈る気持ちで下山する。A.C.に着いた時(10:15)には、完全にニベソツはガスの中で、我々がガスの中に入るのは時間の問題である。それまでの僅かな時間で、昨日の雪洞まで下らねばならない。スキー場のようなあの斜面は、クラストしており、登る時考えていたほど快適にはおりれない。13:30にようやく雪洞に着くことができた。いつしか空には小雪が舞っていた。

3月28日 快晴である。7:15 出発。小天狗よりB.H.まで続いた広い尾根を、360度の展望を我々がものにして、B.H.まで大滑降と洒落とむ。B.H.に12:15に着き、デボの整理後、そのまま三股まで下山。

さて、この山行は私の夢でもあり、目標の一つであったチンネ冬期登攀へのアプローチに置き換えて、スキーの有用性について考察していきたい。(山スキーの経験の少ない私が言うのだから、異論は多々有ると思われるが……。)

まず、チンネへのアプローチは、星野氏のように、池ノ谷の使用は、法的にも、安全性の面からも不可能である。あとは早月尾根と小窓尾根の2つである。小窓尾根に関しては1,600メートルが限度と思われる。再び、下降ルートにおいては、

ラッシュェノソツの場合には、早月の方が有利であるので、小窓尾根に関して、有用性はまるで無いものと考えられる。また、早月尾根に関しては、文献によると、スキーを使って、馬場島より本峰アタックを一日で行なっていることが示されている。この点から考えるならば、スキー使用は非常に有利と思われるが、今年の冬のような大雪であっても、馬場より伝蔵小屋までトレースが絶えず作り直されるような現在、(但し正月の連休以外は無いものと思われる。)トレースの横をスキーでラッセルすることを考えるならば、それほどの有用性は感じられない。

これまで、スキー否定論ばかり述べてきたが、私は決してスキー否定論者であるのではない。ただ、昨今、非常に山スキーが流行して、スキーがラッセル万能選手の如く言われているのに反抗してみたくしたのである。

もし、ニベソツ山にチンネが有ったならば、その時、我々はスキーをフルに活用させるであろう。しかし、それは単にワカンをスキーに履き換えるのではなく、考え方から変えて行く必要があるだろう。(スピード化によって減少する日数と食糧等の変化) (17代)

